世界市民教育プロジェクト　人間形成・教育部門
"世界市民教育"を問う

京都大学教育学研究科
世界市民教育プロジェクト　人間形成・教育部門
D3　武田　萌
M2　エン　ショウネイ
M1　奥田　洸大
教授　三澤　紘一郎
准教授　広瀬　悠三
講師　髙谷　掌子

1．世界市民教育と人間形成・教育部門

私たちは問う。世界市民とは何か。世界市民教育とは何か。哲学者たちの言葉と共に、一緒に考えてみよう。

1.ディオゲネス（『ギリシア哲学者列伝』に書かれた逸話）
ディオゲネスがある時、プラトンにぶどう酒を所望し、同時にまた乾し無花果もねだった。そこでプラトンが酒甕をまるごと送ってやったら、「君は、二たす二はいくらかと聞かれた場合に、二十と答えるだろうか。それと同じで、君は所望されたものに応じて与えることもしなければ、訊ねられたことに応じて答えることもしないのだ」というのが彼の返事だった。

2.イマヌエル・カント『教育学』
地図は、ごく幼い子どもまでも含めたすべての子どもを魅了する何かをそれ自体として持っている。子どもが他のあらゆる事柄に飽きた場合でも、地図が利用されると、それでもなおいくらかの事柄を子どもは学習するのである。…その場合に子どもの構想力は、…むしろいわば一定の形象に依存している必要がある。子どもの場合には、現実的には地理から始めることができよう。…すなわち、こうした形象は地理を生き生きとさせるに違いない。

世界市民教育についての問いの例

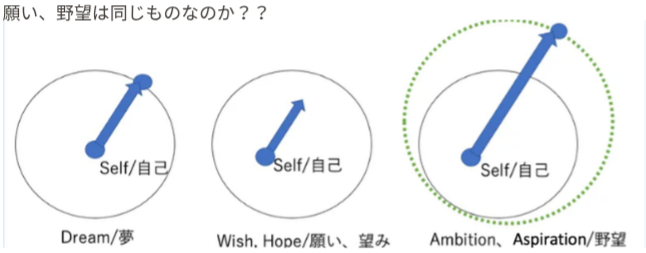
- 世界市民になるために教育するとは何か
- 世界市民には何が求められるのか
- 世界市民同士での対立をどう解決するか
- 子どもの教育と大人の教育に違いはあるか
- 世界市民を定める共通のルールは必要か
- 想像力は世界市民教育にどのように寄与するか

参考文献
ディオゲネス・ラエルティオス著、加来彰俊訳、『ギリシア哲学者列伝(中)』、岩波文庫、1989年
湯浅正彦他二名訳、『カント全集17』、岩波書店、2001年
広瀬悠三、『カントの世界市民的地理教育』、ミネルヴァ書房、2017年

2．研究紹介

(1) 夢を持つことはどういうことか
（エン ショウネイ）

● あなたは夢を持っていますか？
夢、願い、野望は同じものなのか？？



● aspirationとは？

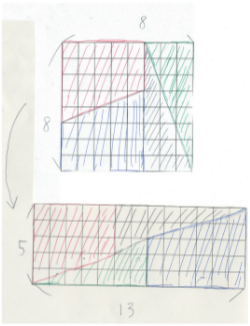
R・W・エマソンの哲学: 呼吸のアナロジー
呼吸は単なる生理現象ではない。自然と精神に共通する、交替と循環の原理を示す。呼吸が吸気と呼気の反復によって成り立つように、思想もまた、一つの考えに固着するのではなく、新たなものを受け入れることで更新され続ける。

S・カベルの哲学: エマソン道徳完成主義
・嫌悪：離れることと向き合うこと。 既存の社会規範から距離を取ることが、新しい思考と自己変容を始める契機になる。
・友人：友人が aversion を単なる社会からの離脱に終わらせず、新しい aspiration へと開いていく媒介になり得る。

参考研究
•Emerson, R. W. (2014). *The completeworks of Ralph Waldo Emerson*. YOGieBooks by Roger L. Cole.
•Cavell, S. (1988). *Conditions handsome and unhandsome: The constitution of Emersonian perfectionism. Open Court.*

(2) 健全な精神は健全な探求に宿る
（奥田 洸大）

● どうやって難しい問題に対処する？
次の主張、本当に正しい？
例：面積が64=面積が65?



● 「問い方」「探求の仕方」を考える
ジョン・デューイは『論理学』において
人々の探求について分析した。
- 探求の目的＝混乱した状況を明確な状況へと転換する
- 探求の過程
  - 問題に対処する際の適切な問いと解決策を出す
    - 面積が同じであることはありえるか
      →二つの図における図形を比較する
  - 推論を行う
    - 赤色の台形の斜線の角度と緑色の三角形の斜線の角度は等しくない
  - 実践しフィードバックを獲得する

→探求の際のより良い問い方や推論、実践が人間のよりよい理解を生む

● 世界市民教育における探求と社会的協働の関係性
世界市民という観点において、他者との協働は一つの大きなテーマとなり得る。
だが、同じデューイ研究者においても、社会的協働に対しての態度は全く異なる。

- ヒラリー・パトナム
  - 科学的探求理論と知性的道徳観による社会的協働
  - 民主主義は様々な実験的探求のための前提条件
- リチャード・ローティ
  - 自律した個人の探求が重要
  - 共感をもとに想像力を養い社会を形成
- ロバート・ブランダム
  - 人間社会における言語コミュニケーションの必要性
  - 人間の推論を最重要のものとする

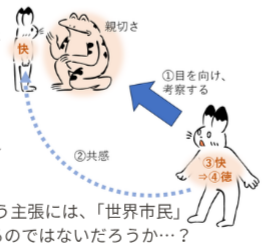
→私たちはどうやって世界市民として社会的協働を成し遂げることができるか？
→その際、社会全体での探求は個々人の探求とどのように調和するのか？
→探求は世界市民教育にどのように寄与するか？

参考文献
Alex Gendler, "Can you solve the Alice in Wonderland riddle?", TedEd. https://ed.ted.com/lessons/can-you-solve-the-alice-in-wonderland-riddle-alex-gendler 閲覧日2026年1月22日
Hilary Putnam, edited by James Conant, "Dewey's Logic: Epistemology as Hypothesis With Ruth Anna Putnam", *Words and Life*. (Cambridge, Massachusetts, and London, England: Harvard University Press, 1995)
Hilary Putnam, "Dewey's Central Insight", *Pragmatism as a Way of Life*. (Cambridge, Massachusetts, and London, England: The Belknap Press of Harvard University Press, 2017)
John Dewey, *Logic: The Theory of Inquiry*. (New York: Henry Holt, 1938)
（ジョン・デューイ著、河村望訳(2017)『行動の論理学―探究の理論―』人間の科学新社）
Richard Rorty, "Pragmatism as Romantic Polytheism", *Pragmatism as Anti-Authoritarianism*. (Cambridge, Massachusetts, and London, England: Harvard University Press, 2021)
Robert Brandom, "Introduction: From German Idealism to American Pragmatism—and Back", *Perspectives on Pragmatism*. (Cambridge, Massachusetts, and London, England: Harvard University Press, 2011)
（ロバート・ブランダム著、加藤隆文、田中凌、朱喜哲、三木那由他訳、『プラグマティズムはどこから来て、どこへ行くのか』勁草書房、2026年）

(3)「世界市民」における道徳の限界
ヒューム『人間本性論』の道徳論を用いた考察　（武田 萌）

● 感覚による「道徳」と、その限界
ヒュームにおいて、道徳的区別は、理性ではなく、行為を見た者自身の感覚senseから引き出される。
- 「何らかの行為、心情や性格に目を向け、考察するだけで生じる快によって徳は区別され、同様の苦によって悪徳は区別される」(THN 3.1.2.11)

しかし、人間が目を向け、考察することのできる範囲は限られている。（例：家族や近しい人たちに対してと、地球の裏側に住む人たちに対して、同様に親切にできるか？）



➡”人間は、理性ではなく感覚により道徳的である”という主張には、「世界市民」における広い範囲の道徳を念頭に置いた場合、限界があるのではないだろうか…？

● 人間は社会を必要とするが、社会は学習のみによっては作られない
- 「ただ、社会によってだけ、人間はその欠陥を補って、他の生き物と同等の地位に上ることができ、さらに、それより優位に立つことさえできる。」(THN 3.2.2.3)

➡人間は、社会を形成し協力することによって、強さ・能力・安全を確保する。

一方で、人間は利己的であり、遠くの者よりも近くの縁者や知人に愛情を抱くものである。より広い範囲で新しい他人と結合する必要がある社会形成の利点に、「学習と反省study and reflection」(THN 3.2.2.4)のみで気づくことは不可能に思われる。

● 社会形成における道徳の限界に対する、「教育」の可能性
- 「人々は、早くから社会の中で教育されることによって、社会から得られる利点がはかり知れないことに気づくようになり、加えて、人との交わりや会話を好む新しい感情を身に着ける。」(THN 3.2.2.9)

➡ヒュームにおける教育は、観念を何度も提示することによる「意見の植え込み」である。このような教育は間違いうると批判の的になるが、社会において「学習」や「共感」といった方策ではアプローチできない領域を担ってきたのではないか。
➡「世界市民」の成立と、遠くの他者とつながる「教育」とは、切り離せない関係にある？

参考文献
Hume, David. (2000). *A Treatise of Human Nature: Being an Attempt to Introduce the Experimental Method of Reasoning into Moral Subjects*. Ed. By David Fate Norton & Mary J. Norton. Oxford University Press.
神野慧一郎(2002)『況々はなぜ道徳的か――ヒュームの洞察』勁草書房。
O'Brien, Dan. (2017). Hume on Education. *Pacific Philosophical Quarterly*, 98 (1), 619-642.

3．昨年の活動報告



● 立命館大学国際平和ミュージアム訪問（2026年1月20日）
- 立命館大学の「平和と民主主義」の教学理念を具体化する教育・研究機関として、また社会に開かれ、発信する施設としてのミュージアム
- 君島東彦 特命教授による講演会「平和教育を再構築する――関係性としての平和」を開催しました



● ウトロ平和祈念館訪問（2025年7月15日）
- 歴史を継承するだけではなく、地域の人々に開かれたコミュニティの拠点、かつさまざまな地域の若者たちが出会い交流を深める場としての祈念館
- スタッフの方のご講話・展示紹介からウトロ地区の「小さな統一」の歴史について学びました

WEBサイトはこちら